思いをつなぐ

～8月6日，私のヒロシマ～

〈 発刊にあたって 〉

原子爆弾によって被害を受けた人の高齢化が進むなか、私たちは様々な取り組みを通して、その体験を風化させることなく後世に語り継ぎ、二度と戦争を引き起こさないよう、戦争の悲惨さや平和の尊さ、また核兵器の廃絶を訴えていかなければならないと考えています。

この「時をつなぐ平和絵本」は、市内中学生のみなさんが、被爆された方の体験を聞き絵本にする取り組みで、制作を通して被爆の実相を知るとともに被爆者の平和への思いを受け継ぎ、伝え、広げていくことを目的としています。

この絵本を通して、被爆者と子どもたちの平和への切なる願いが、一人でも多くの人に届くことを期待しています。

最後に、自らの被爆体験をお話しいただいた上本保彰様、並びに絵本の作成にご協力いただきました第三中学校３年生のみなさん、そしてご指導いただいた先生方に心から厚くお礼を申しあげます。

令和４年３月

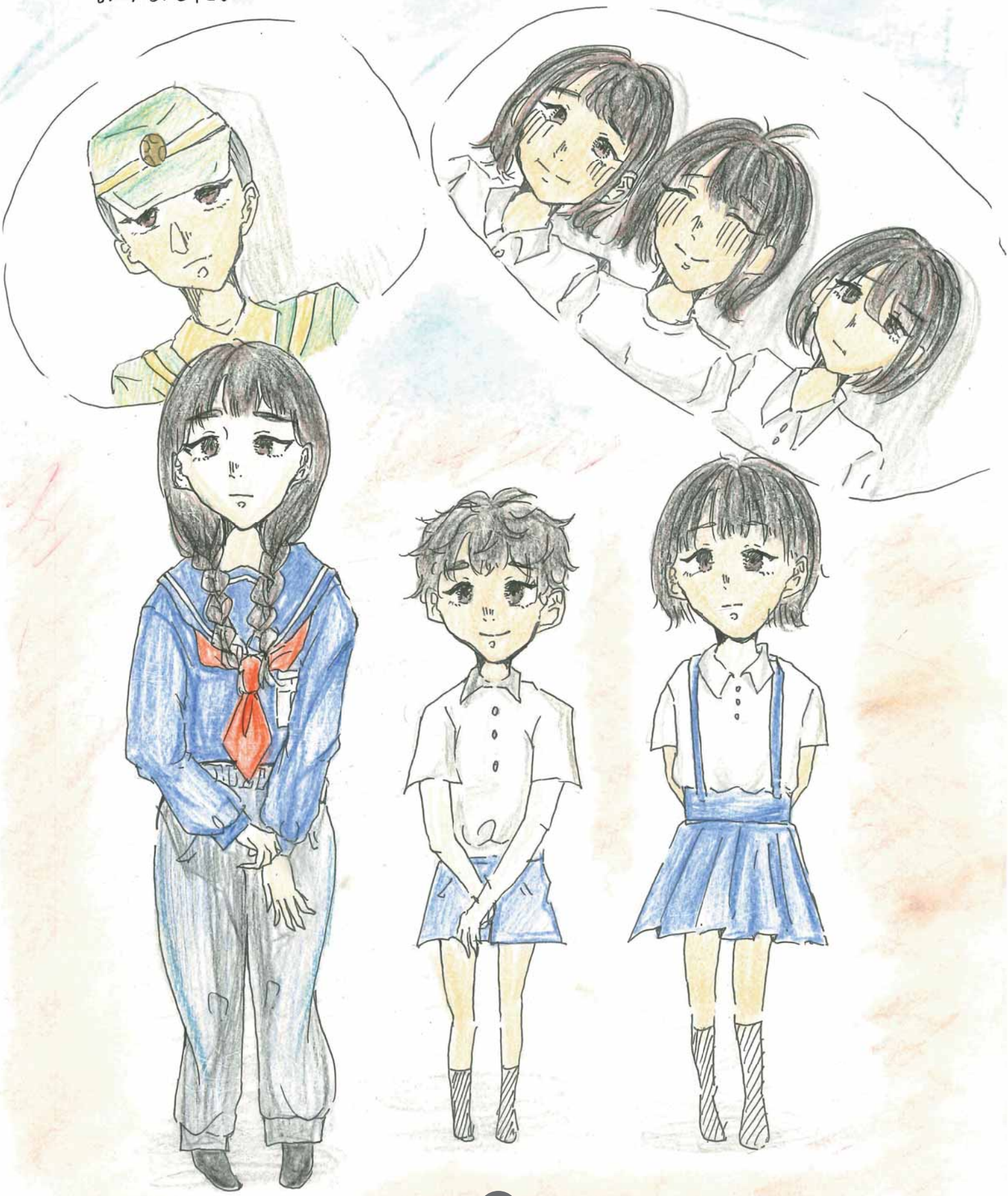
富田林市

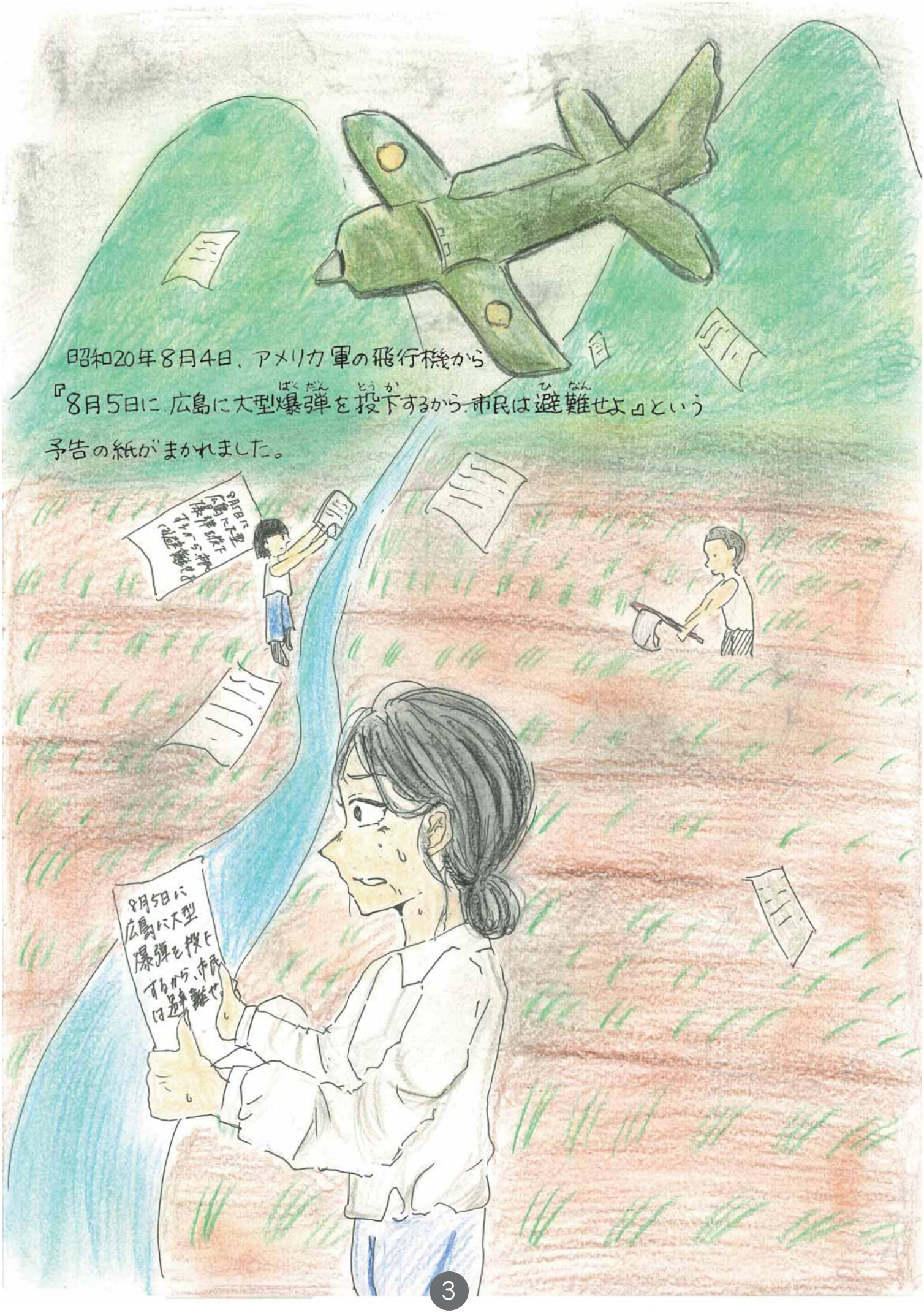
令和３年８月６日 富田林市立第三中学校の平和登校日に

広島での被爆体験を語られる上本保彰（うえもとやすあき）さん。

私の家は、広島市の爆心地から北西に13キロ離れた安佐南区沼田町で、農林業を営んでいました。

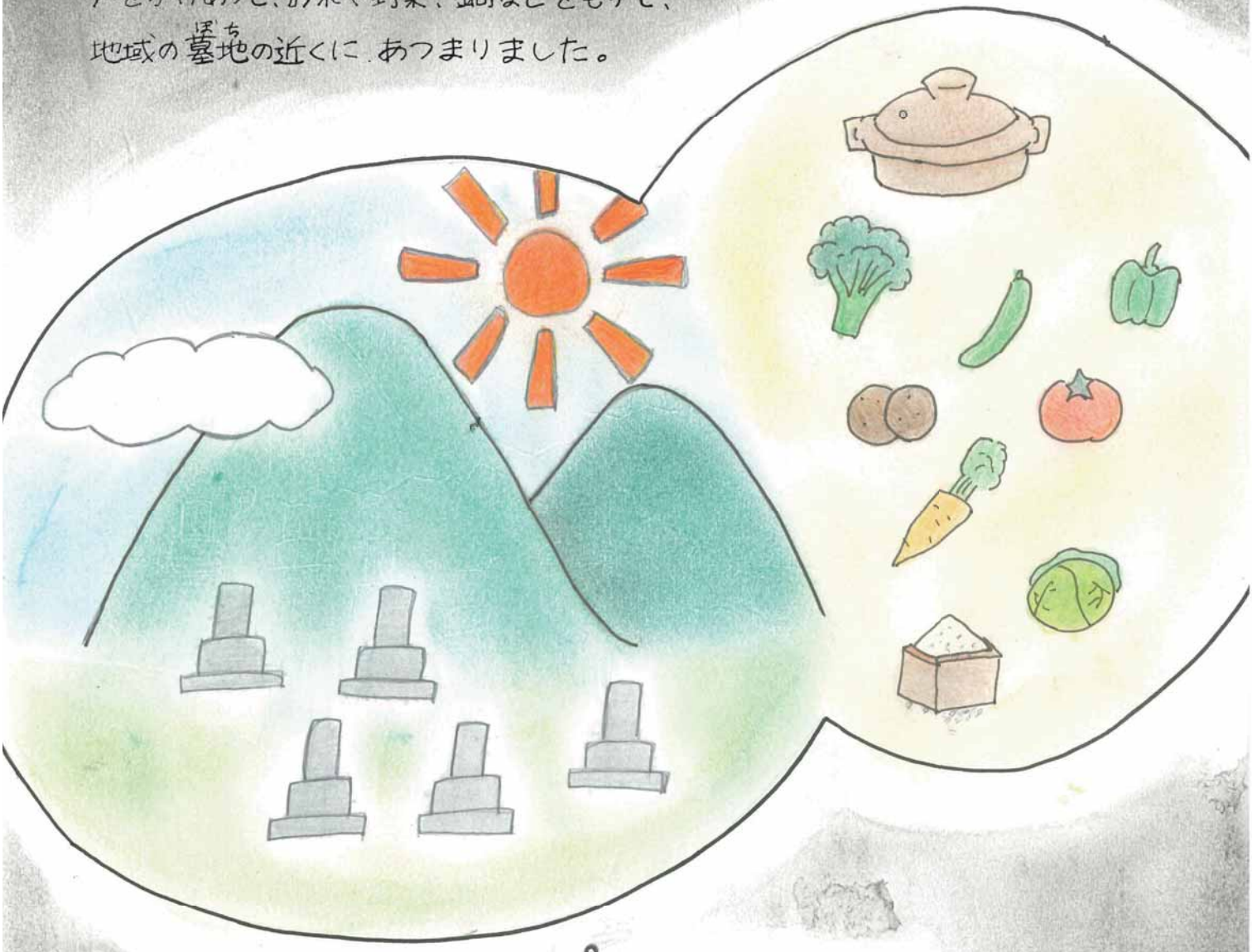
76年前、私は5歳でしたが、そのときの体験は今でも鮮明に記憶しています。
当時、兄は兵隊になっており、就職している姉が3人と、中学生と小学生の姉がおりました。





昭和20年8月4日、アメリカ軍の飛行機から
『8月5日に、広島に大型爆弾を投下するから、市民は避難せよ』という
予告の紙がまかれました。

8月5日の朝、近所の人たちが
声をかけあって、お米や野菜、鍋(なべ)などをもって、
地域の墓地(ぼち)の近くに、あつまりました。



みんなで、車座になって、

『死ぬときはみんな一緒だよね。生きていたら助け合いましょうね。』

と、死を覚悟したような会話をしながら、食事をしました。

その日は、何ごともなく、

夕方には、解散しました。

次の日、8月6日の朝、私は、畑作業をしている両親のそばにいました。

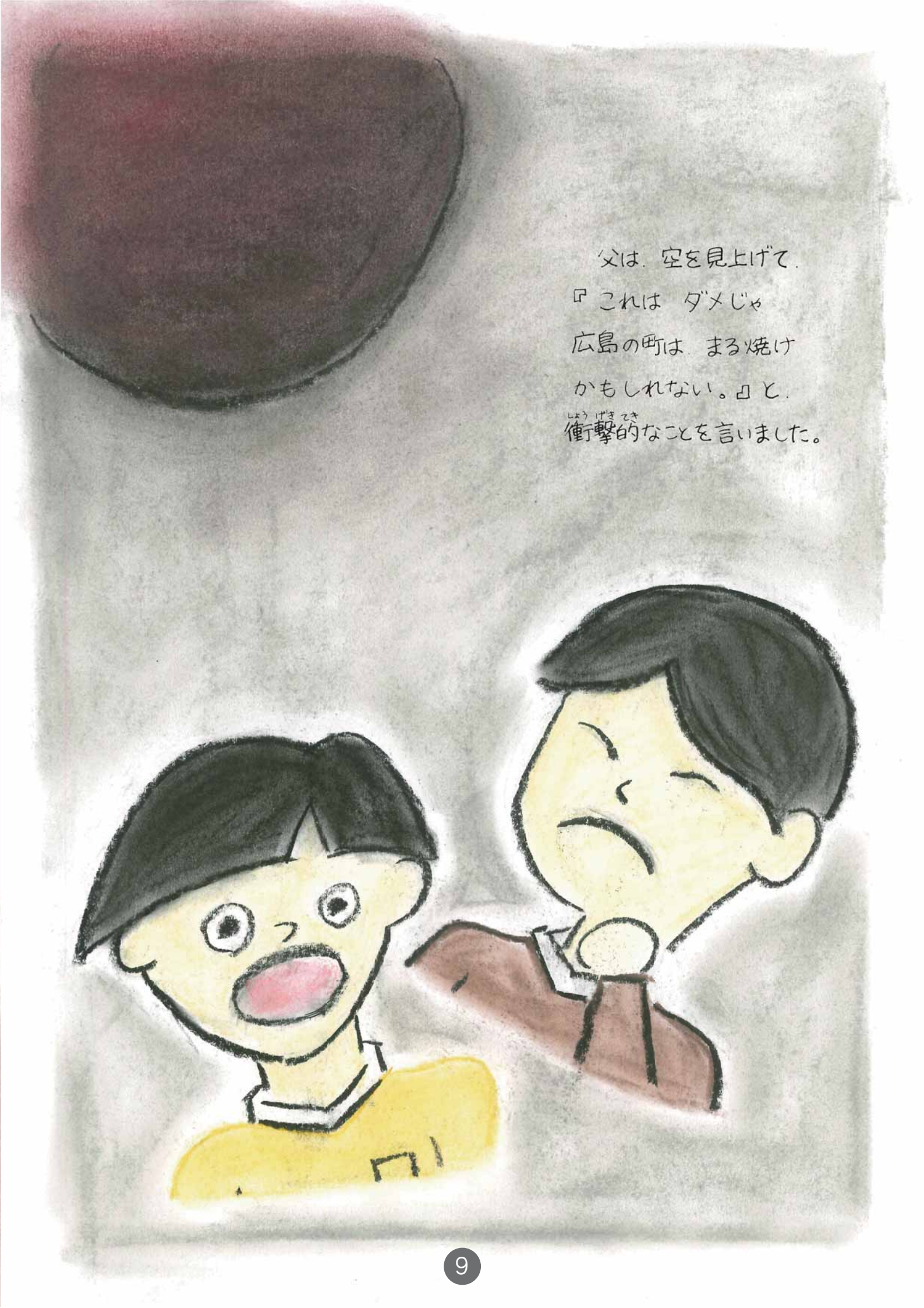
8時15分、ピカッと強烈な閃光が走りました。

一瞬、稲光かと思って、あわてて母のそばに走りよった

その時、

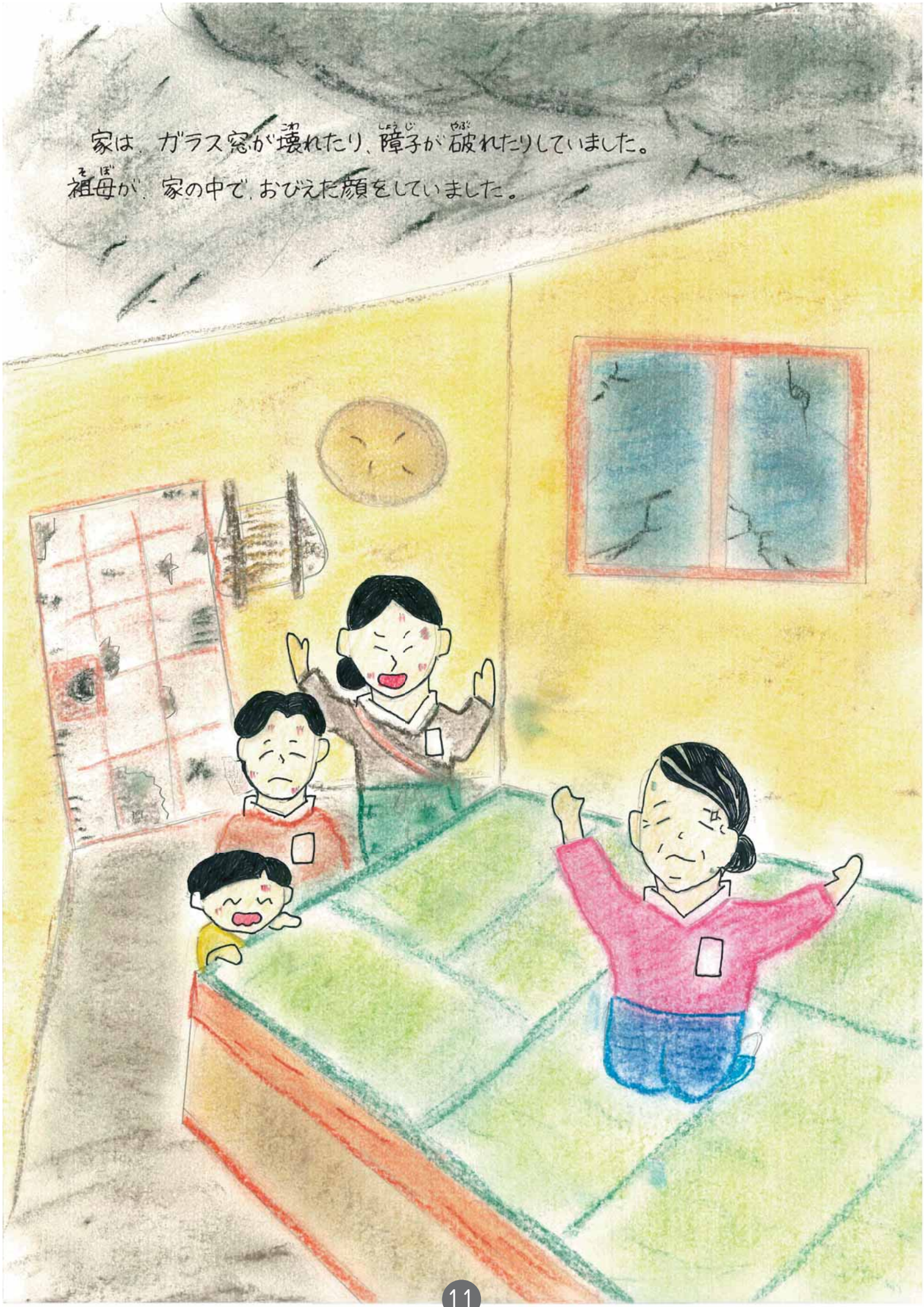
ドーンという
猛烈なごう音で
地響きがして、
体が震えました。

母は、私を
抱えるようにして、
防空壕に連れて
入りました。



父は、空を見上げて、
『これは　ダメじゃ
広島の町は　まる焼け
かもしれない。』と、
衝撃的なことを言いました。

そのうち
空は真っ暗になって、
すごい暴風雨になり、
びしょ濡れになって家にもどりました。


家は、ガラス窓が壊れたり、障子が破れたりしていました。
祖母が、家の中で、おびえた顔をしていました。

そのうち姉たちも帰ってきて、家族全員、ケガなく無事だったことを喜んだものの、姉たちは、それぞれが、こわかったことを話し、なかなか眠れなかったようでした。

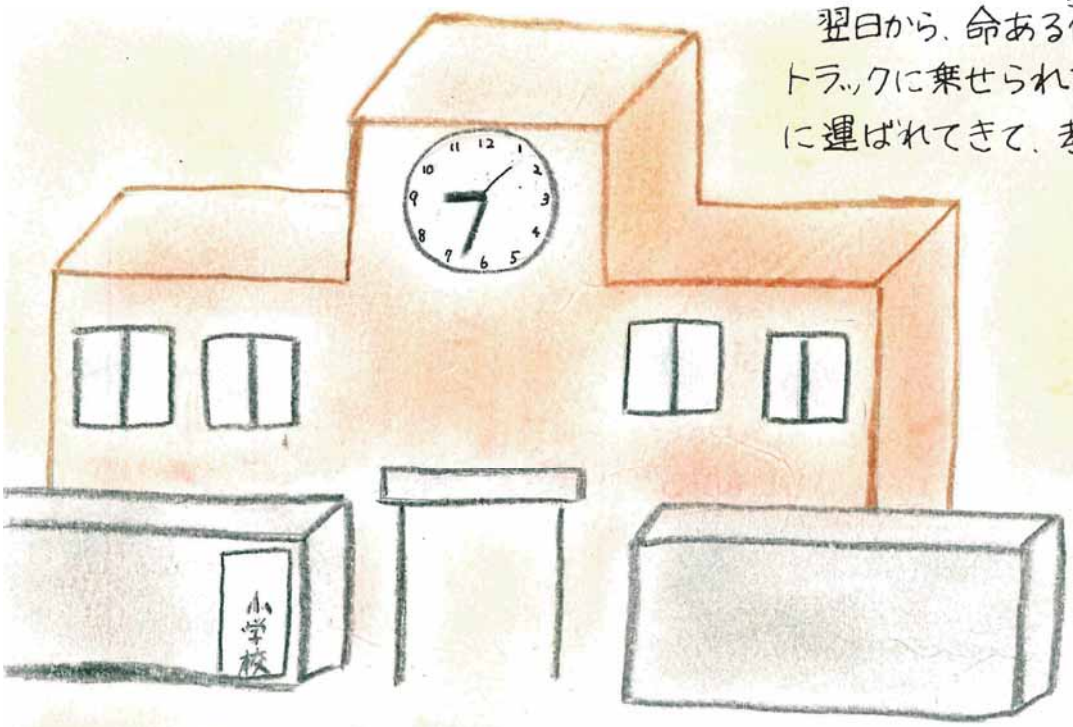
何日か過ぎて、ラジオ放送で、父が、原子爆弾のことを知り、
私は、父から原子爆弾の怖さを教えてもらいました。

原子爆弾が落とされた日、私の町では空から色々なものが降ってきました。

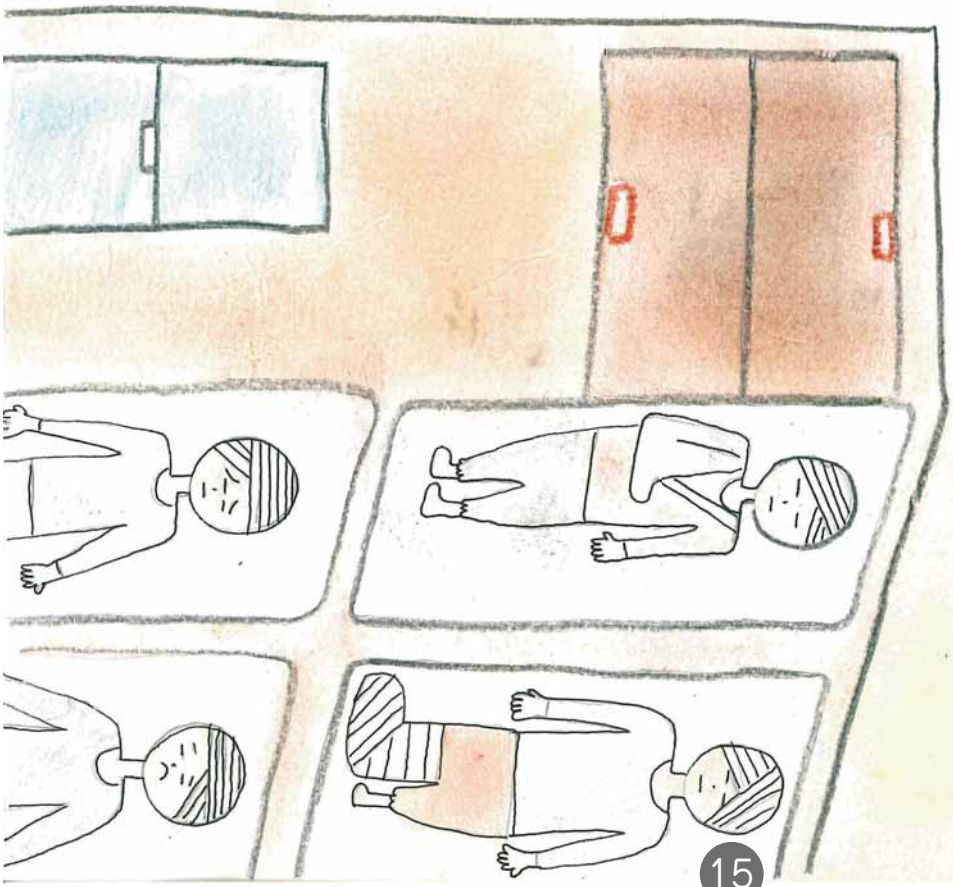
ほとんどが、焼け焦げた衣類や紙くずで、家の屋根をはじめ、田んぼや畑そして山々に

落ちてきました。

翌日から、命ある傷ついた被爆者が、トラックに乗せられて、私の町の小学校に運ばれてきて、教室に寝かせられました。



母たちが、食事や身のまわりのお世話をしていました。



母について行った私は、ひどい火傷にハエがたかり、うじ虫がわいていたのを見て、おどろきました。

傷ついた人の中で
亡くなっていく人の
お世話は、父たちが
しておりました。

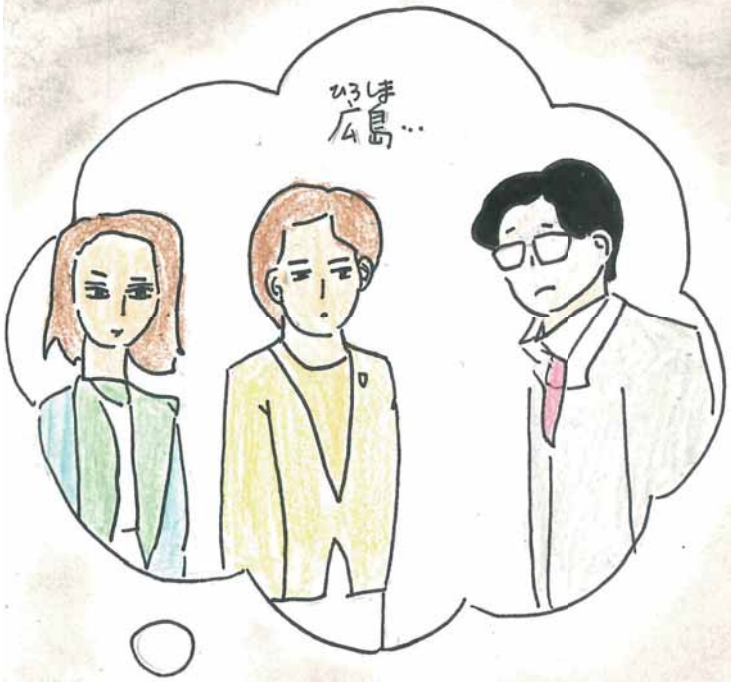
手当てを受けている人たちのようすを見たり聞いたりしていた
5歳の私は、『人の命の尊(とうと)さ、大切さ』を、しみじみと感じました。

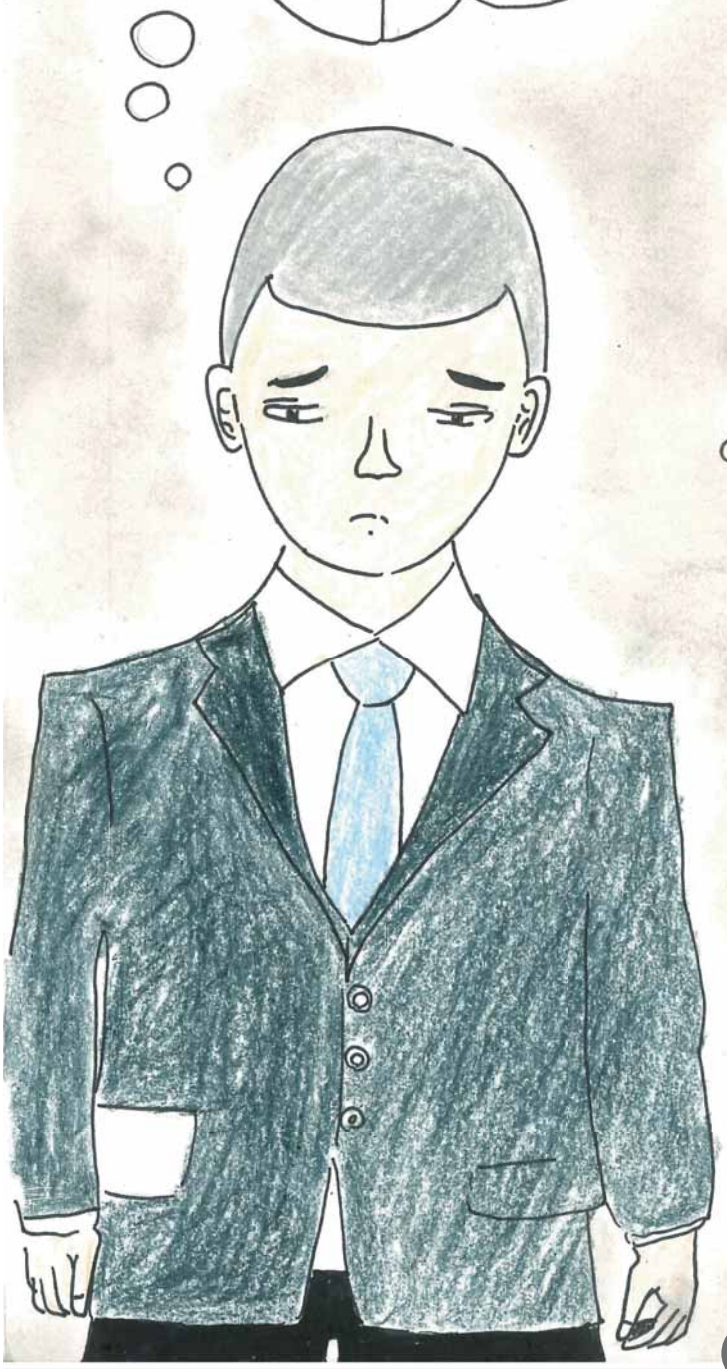
親せきのおじさんは、身内の安否が気になり、
3日後の9日に、焼け野原を歩いて探しに行きました。
2日間かけて探し回りましたが、だれ一人みつからず、帰ってきました。

このときに放射能物質を身に受け、
数年後に、おじさんは白血病で亡くなりました。

大人になってからも、つらいことがありました。
つき合っていた女性から、ある日突然「わかれてほしい」と言われました。
両親に、『被爆して、放射能物質などをもっているかもしれない人と
つき合うことはキケンだ』と言われたそうです。
『私とつき合うことによって、彼女を
不幸にするのか』と思って、
わかれることにしました。
（つらかったです…）

仕事についてから、
全国あちこちに行くことになりましたが、
出身をきかれて「広島です」と答えると、
すぐ目線をそらすなど、イヤな態度を
とられたことがありました。
『放射能をもっていないですか』と、
はっきり言う人もいました。

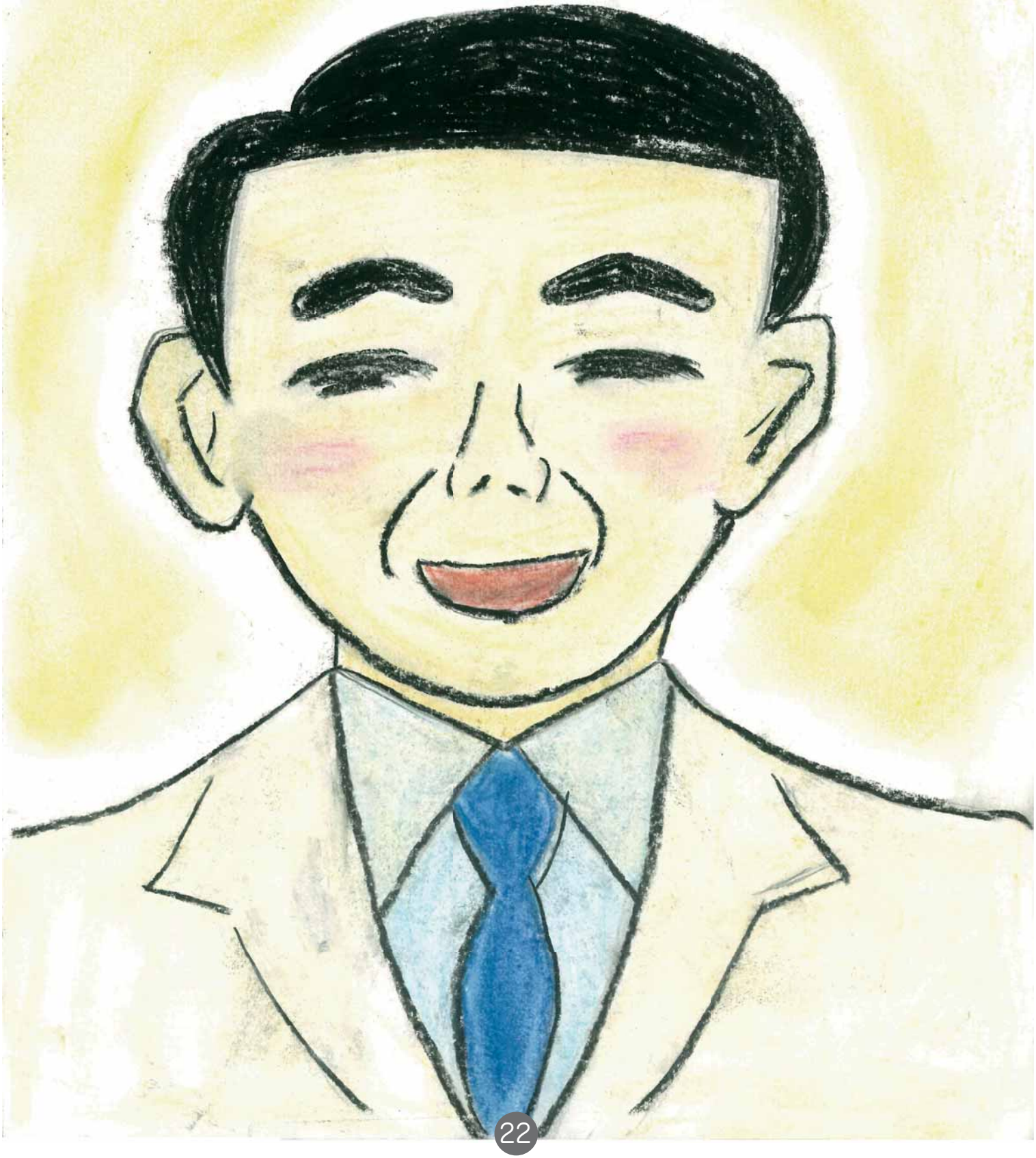




それから私は、あいさつのとき、
かならず、「放射能をもっておりません。
どうぞよろしくお願いします。」という
ふうに、今日まで言ってきました。

広島に帰ると、故郷の山々は、とても美しいのですが、山肌や野原が、衣類や紙くずの焼け焦げたものでいっぱいだったのが忘れられません。

私の人生のもとになっているのは、5歳のときの原子爆弾投下の体験です。「戦争であっても、人が人を殺すのは許せない。戦争のない世界になってほしい。」と、強く思って生きてきました。二度と再び、原子爆弾が投下されることがないことを、心の底から願っております。



～あとがき～

私たちは、6月に「ヒロシマでの被爆追体験」を中心とした修学旅行を予定していましたが、コロナ禍で、コースの変更を余儀なくされました。そこに、富田林市人権・市民協働課より、『富田林在住の上本保彰さんから被爆体験をききとり、それを絵本にする』という企画をいただきました。

上本さんには、8月6日、第三中学校の平和登校日に来ていただき、午前8時15分、私たちと同じ空間で、黙祷したあと、76年前の同じ時に、ヒロシマで体験されたことを、きかせていただきました。

生徒一同、たいへん貴重なお話を、胸に刻むことができました。

その中で、13名の生徒が、この貴重なお話を多くの人に伝えようという思いで、絵本づくりに参加してくれました。　生徒ひとりひとりが、それぞれに個性の光る絵に仕上げてくれ，私も、手書きの文を添えました。

今回、第三中学校の51期生が、富田林で、上本保彰さんと出会い、76年前にヒロシマで起きたことを、直接きく機会をいただいたことは、貴重な財産となりました。

この絵本と出会った人が、上本さんの体験を感じとり、戦争を許さない心を受け継いでいくことを　期待しています。

富田林市立第三中学校　三年主任
山口　佳代

《 時をつなぐ私たちの思い 》

～ 絵本の制作に取り組まれたみなさんに、それぞれの思いを綴っていただきました。～

【富田林市立第三中学校３年生のみなさん】

☆荒堀　ことは（表紙・１・９・１４・２１・２２ページ担当）

私は上本さんの話を聞いて、原爆が落ちていない所でも原爆の被害がたくさんあったことを知りました。想像をして絵を描いていると、本当に上本さんがどれほど大変で苦しかったかがよく分かりました。

表紙にも描きましたが「過去と未来をつなぐ」に願いを込めて、過去にあったことや差別で被害にあって辛い思いをするような人がいなくなってほしいと心から思いました。とても辛くて忘れたい記憶を私たちに話してくれたことは絶対に忘れないと決めました。

絵を描くことができて上本さんには本当に感謝でいっぱいです。そしてこれからは笑顔のたえない日々を過ごしてください。

☆松尾　知佳（ちか）（２・３ページ担当）

自分が担当したページは、登場人物と避難警告の所でした。

避難警告をいきなり受けた人々は、どんな反応をしたか、どんな表情で紙を見たのかと想像して描きました。私はこの本の絵を描いて本当に良かったと思います。

この本の題名のように、本を手に取り読んでくれる人達に、戦争のことを忘れず、受け継いでほしいと私は願っています。

☆西本　冴（さえ）（４ページ担当）

私は、山にある墓地に食料などを持って逃げる場面を描きました。

描きながら思ったことは、皆生きるのに必死で支え合っているんだということでした。

絵本に参加して、実際に被爆された方の体験を元に描くのは貴重なことだと感じました。

☆髙橋　菜芭（なのは）（５ページ担当）

私は、戦争を繰り返さないために何かできることはないかと思い参加しました。

想像して絵を描くのが難しかったですが、当時の人がどれだけ不安で恐怖を感じたかと思うと胸がいっぱいになりました。

この絵本を通して戦争の残酷さや命の尊さ、平和の大切さを感じてほしいです。

☆中野　由愛（ゆうあ）（６・７ページ担当）

私は、この絵本で一番大事なページであろう「ピカドン」のところを担当しました。

実際に聞いた話に基づいて、自分でも調べたりしながら描きました。なかなか悲惨さを表現できず、とても悩みました。「きっと実際はこんなのよりも・・」と思ったりもしていますが、この絵本を読んでくれる人に、少しでも平和の意識や戦争の怖さが伝わってくれたらいいなと思います。

☆藤原　樹（いつき）（８・１０・１１ページ担当）

原爆が落とされた後の風景、人の表情や様子を描くのは大変でした。実際に体験した方の話を聞くのは滅多にない機会だったので、細かく説明していただいた当時の様子を、分かりやすく伝えられるように頑張りました。

絵本作りに携われたことは凄く良い経験だったと思います。

☆木村　和美（なごみ）（１２・１３ページ担当）

私は、上本さんの話を聞く前まで、戦争によって起こった出来事を甘く考えていました。

原爆が落とされたその場にいなかった私たちには、想像することしかできませんが、実際に起こった出来事は、その想像の何百倍も辛いことだったんだと知ることができました。

☆山田　萌楓（ほのか）（１５ページ担当）

私は、上本さんがお話ししてくださった中の、原爆が落ちた次の日のお話の部分を担当しました。

上本さんが体験したお話は、私には想像できないほど辛くて苦しい事だと思いました。そのお話をそのまま絵にするのは難しくて、私の絵では伝わらない事も多いと思うのですが、この絵本の一場面を描くことができて良い経験になりました。少しでも多くの人に伝えていけたらと思いました。

☆新谷　颯祐（さすけ）（１６ページ担当）

戦争ということで美化することなく、聞いた内容をそのまま描きました。

戦争をすることで人の命について問われ、同時に今の平和といえる社会について考える事ができたと思います。

絵は上手に描こうとせず、残酷さを描くのは良いと断言できないので、悲しさを題として描きました。

☆柳本　栞里（しおり）（１７ページ担当）

私の書いたシーンは、感情をどのようにして表すかというのがとても難しかったです。もし、自分が上本さんの立場にいたとしたら、どんな表情をしているかを考えて描きました。

初めてこのような企画に参加していい経験となりました。ありがとうございました。

読んでいる人には、上本さんの視点や気持ちに立って読んでほしいです。

☆大谷　望愛（のあ）（１８ページ担当）

自分は、焼け野原の場所に、親せきがいるか探しに行く場面を描きました。

描いていて思った事は、本当に被害が大きかったんだということです。当時の写真を見ると、けが人だらけの焼け野原で、写真を見た自分も辛くなりました。

今思う事は、平和な世界になったということです。これからも、戦争の事を知って、戦争を知らない人たちに伝えたいと思いました。

☆山本　那智（なち）（１９ページ担当）

私はこの場面を描いた時、できるだけその場の雰囲気が伝わるよう、意識して描きました。

上本さんが、広島で被爆したことが理由で、彼女に別れを告げた時、もし自分だったらとっても辛かったと思います。その時の上本さんの気持ちが伝わればいいと思います。

この絵本作成に参加して良かったです。

☆杉野　紅奈（くれな）（２０ページ担当）

この絵本は、上本さんが実際に経験した話が元になっていて、私はこのお話を未来に繋げていかなければいけないという想いがあり、今回この企画に参加させていただきました。

戦争は、終戦したら終わりではなく、上本さんのようにずっと戦争に苦しめられてきた方もいます。この絵本を読んで、戦争の悲惨さ、残酷さを少しでも感じてほしいです。

思いをつなぐ

～ ８月６日 私のヒロシマ ～

令和４年３月発行

＜体験談話＞

上本（うえもと） 保彰（やすあき）

＜絵・文章＞

富田林市立第三中学校のみなさん

荒堀 ことは / 松尾 知佳 / 西本　冴

髙橋 菜芭 / 中野 由愛 / 藤原　樹

木村 和美 / 山田 萌楓 / 新谷 颯祐

柳本 栞里 / 大谷 望愛 / 山本 那智

杉野 紅奈 / 山口 佳代（文章）

＜編集・発行＞

富田林市 市民人権部 人権・市民協働課

〒584-8511 富田林市常盤町１-１

0721-25-1000（代）